

第五章 倫理的文法機構

一

此の歴史的社會的現實、行動的世界の構造は我と汝と物との立體的相關である。我が汝に何事かをとする世界である。自動と製作と行爲とが三次元的に嚙合ふ世界である。我、汝、物の三角點的緊張の場である。その中、物は我に所屬することも出来るし、又汝の領域に屬することも出来る。只汝の存在だけは我の力で如何ともすることの出来ない絶對的なものである。物もかゝる汝の性格を帯びる時、眞に對象として迫り來るのである。古代神話にありては、總ての事物現象は畏敬すべき神々でもあり、忌嫌ふべきデモンでもあつた。汝の存在は神話的世界に於ける神格の如く、この歴史的世界に於て如何ともすることの出来ない絶對的事實でなければならない。

倫理的な文法機構といふのは、かやうな行動的世界の誠の上に立つものである。倫理的世界觀の眞實をそのまゝ反映せる文法である。強ひて我の上にこだはることなく何處までも率直に汝性を立てて行かうとする、美しき精神的習慣の上に生れた文法機構である。我から汝への文法である。對話の

眞を映す文法事實である。故に之を敬語法と稱するのである。敬語法といふ名稱の外に、敬讓法と
 か待遇法とか稱格法などと言ふこともあるが、矢張右の様な意味合から、敬語法の方が最も適確に
 その眞相を捉へ得てゐると思ふ。

敬語法、即ち倫理的文法機構の基礎となるものは對話の稱格である。稱格といふのは言ふまでも
 なく、對話現象に於ける我と汝と物との位格づけである。自分の事を言ふのは自稱(第一人稱)、相
 手の事を言ふのは對稱(第二人稱)、第三者のことを言ふのは他稱(第三人稱)である。例へばフラ
 ンス語の「持つ」といふ意味の動詞に於る直接法現在の稱格は

S.

P.

I J'ai (=j'ai)

nous avons

II tu as

vous avez

III { il a
elle a

{ ils ont
ells ont

の如きである。この場合注意しなければならぬことは、主格と述格との間には必ず稱格的統一がな
 ければならぬのである。tu as は飽くまで tu as でなければならず、決して *tu es* とか *tu es* など
 として動詞や代名詞の位格を取違へてはならぬのである。併し右フランス語では特例とも言ふべき

ものが一つある。それは *tu as* は二人稱には相違ないが、実際には親密な間柄にだけ用ひられるのであつて、普通の社交上の對話の際は複數の *vous avey* が行はれてゐる。更に言へば父親が息子に對しては *tu as* であるが、息子が父親に對しては、*vous avey* を用ひ、妻は人の面前では夫に *vous avey* を使ふが、二人同志の場合は *tu as* を使ふのである。ドイツ語にも一種の階級的區別がある。それは *Verstehst du?* と *Verstehen Sie?* との區別である。尤も昔は、この外に *Versteht Ihr?* と *Versteht Er?* とがあつて四つの等級を區別してゐたと言ふが、現在では前の二つだけが残存してゐるのである。英語で神に呼掛けたり詩作の時に限り使はれる *thou art* の如きも之に類する。

西歐語の稱格は普通、前者の如き所謂 *Three dimension* であるが、中には後者の如きものもあるのである。右の例の如きことは何を意味するものであらうか。前者の *Three dimension* 式な稱格は客觀的敘述の爲の稱格と言ふべきである。三次元的行動世界を平面化し、之を性の世界、數の世界と同様に對象論的に觀たる稱格である。然るに後者の *tu as :: vous avey* の如き稱格は、眞に行動的世界の眞只中に立ち眞の汝性といふものを直接的に意識せる稱格である。對話的稱格である。前者は論理的稱格とすれば後者は倫理的稱格である。而して日本語では性とか數とかといふものの文法がないと同様に、論理的稱格といふものも發達してゐないのである。例へば

私が持つ 君が持つ 彼が持つ

何れでも差支ないのである。日本語の稱格は後者の如き倫理的稱格でなければならぬ。敘述的稱格ではなく對話的稱格でなければならぬ。故に論理的文法機構と獨立せる倫理的文法機構を成立せしめ得る基礎となり得るのである。

對話的稱格が倫理的文法に於ける基礎となるといふことに就いては今少しく考へて置かねばならぬ。論理的文法に於ける論理的稱格は敘述の一形態である。數とか時などと同じく人稱は形態に過ぎない。その爲その稱格を最も直接的に表示する要素としての代名詞は、恰も名詞に對する冠詞の如く、動詞の形態部であるかの如き觀を呈するのである。勿論かゝる代名詞と雖も單なる形態部ではなく、名詞に對立すべき機能をも有してゐるのであるが、兎も角それは動詞と常に一體的である。そこに論理的文法、殊に西歐語に於ける代名詞の機能範疇づけの困難さがあるのである。然るに倫理的稱格は之と全く反對に、敘述を超えて敘述を更にその形態の如くにしてゐるのである。例へば私があなたをお捜し致しました。

と言へば、「お捜し致し……」は只單に主格「私が」に對する述格ではなく、「私があなたを」といふ倫理的緊張關係を表示してゐるのである。即ち捜すといふ敘述内容を捨象すれば、接辭「お」は私があなたに對する尊敬の心遣を示し、「致し」は私があなたに對する謙讓の心遣を示し、かくて「お〇し致し……」は此の敘述に於ける自分と相手との倫理的緊張關係を示す形態と見ることが出

來るのである。又

あなたが私をお捜しなさいましたか。

と言へば、「お」も「なさい」も私があなたに對する尊敬の心遣を示し、「お〇なさい……」は「あなたが私を」といふ前と違つた倫理的緊張關係を表示してゐる。而してかゝる話の全機構は言主が聽主に對する謙讓とか謙虛とか言ふ種々微妙な倫理的緊張を表示する一連の形態と見做すべきものであるが、特に「……………ました」「……………ましたか」はそれを端的に表示し、かゝる實在的言主と聽主との間柄を示すに足る形態となつてゐる。随つて

あ、煙が見えて來ました。

これは蛇苺ですよ。

何でございますつて。

の如き敘述にも相手に對する倫理的緊張關係が表示されてある。以上の如く倫理的文法では倫理的稱格が主體であつて、敘述はその主體間の關係を表示する機能と見なければならぬ。故に種々の敘述機構は一般に倫理的文法に於ける形態と考へて差支ないのである。それは論理的文法、殊に西歐語などに於ける關係と逆轉してゐる。随つてかゝる倫理的文法に習熟すれば、譬ひ主格とか補格とかといふものが省略されてゐても、動詞とか助動詞などによつて形造られた倫理的形態を辿つて、

其の省略された主格とか補格とかの何物なりやといふことが略推察出来るのである。嚮の例で、わざ／＼「私はあなたを……………」とか「あなたは私を……………」などと斷らなくても、只「お捜し致しました。」とか「お捜しなさいましたか。」と言ひさへすれば、聽者は容易にその稱格關係を推定するのである。併しその何れを選ぶかといふことは言表の問題で、文法の問題ではない。文法學はその可能を限界づければよいのである。かやうな省略述法は、源氏物語などの古典にも暫々表れる日本語の最も特徴的な現象の一つであるといふことは周知の事實と思ふが、之は取りも直さず日本語の稱格、即ち倫理的稱格といふものが敘述に制せられてゐないことを意味するのである。西歐語では稱格代名詞は必ず述語に伴はなければならぬが、日本語では之を超越してゐる。否、日本語の倫理的稱格は敘述を超越してゐるばかりでなく、反對に之を制してゐる形になつてゐるのである。

以上の如く倫理的文法機構の基礎とも言ふべきものは倫理的稱格、即ち日本語の稱格の如きものであるが、次に之を分析し範疇づけてみよう。

一體、稱格の表示は如何なる言語にありても常にその代名詞組織に於て最もよく見られるのである。日本語でも、その稱格の要領を最も適確に把握せんとするには、先づ代名詞に就いて見なければならぬ。日本語の代名詞には種々のものが混入してゐてその姿體は極めて複雑であるが、その中

も根元的なものは、「わ(あ)」「な」「い」「そ」「か」「あ」「た」「いづ」「ど」等の數語であらう。之等のものを種々の語、或は「れ」とか「こ」とか「ち」とか「ら」の如き語片に冠して様々の特殊なものを派生せしめ、又他の體言の如きものから轉用されるものもあり、かくて現在の如き複雑な内容となつたものである。併しかやうに語彙的なものの上に如何程變動があらうとも、その稱格の根本は微動だもしてゐないのである。そののみか、かやうな複雑相は却つて稱格性を微妙に顯にしてゐるものと言はねばならぬ。そこで先づ之を「Three dimension 式に分析すれば、「わ(あ)」「……」の類は自稱(第一人稱)と稱せられるもので、我の世界自己の領域を示すものである。次に「な」「……」の類は對稱(第二人稱)とも稱せられるもので、汝の世界相手の領域を示すものである。而して其の他は他稱(第三人稱)とも稱せられるもので、物の世界或は他界、客觀界對象界を示すものである。他界には既知的な世界と未知的な世界とがある。前者は「こ」「そ」「か(あ)」「……」の類で定稱と稱せられ、後者は「た」「いづ」「ど」……の類で不定稱と稱せられてゐる。

以上の如きことは西歐語等の論理的稱格と外觀上何等變りなきものであるが、日本語に於ける論理的稱格としての最大な特徴は、定稱が更に「こ」「……」の類「そ」「……」の類「か(あ)」「……」の類の三稱格に分れてゐるところにあるのである。此の三稱格の區別は倫理的稱格の餘勢が論理的稱格の框から溢れ出たものとも言ふべく、倫理的稱格の眞義を捉へんが爲には先づこの三稱格の區別を正當

に理解しなければならぬ。さうして、それを契機として今一度日本語の稱格の全面に對し新たに認識し直さねばならぬのである。併し今までのところ、普通に之を近稱、中稱、遠稱などと稱し、自己中心的に考へてゐたやうである。我との距離關係を基準にして考へてゐたやうである。即ち、「これ」「こゝ」「こちら」などの近稱は言主に最も近接せるものの指稱であり、「かれ」「あれ」「かしこ」「あそこ」「あなた」「あちら」などの遠稱は言主に最も遠隔せるものの指稱であり、而して「それ」「そこ」「そちら」などの中稱は之等の中間に位するものの指稱であるといふ如く考へられてゐたやうである。併しこの三稱格の區別は、かやうな自己中心的考へ方では到底その真相を捉へることは出来ないのである。例へば「こ」……の類「か(あ)」……の類の如きものは、或は近稱遠稱でも解決がつくかも知れないが、「そ」……の類に至つては、實は如何ともすることが出来ないのである。英語の *this, that* の如く事態は簡單ではない。日本語の「それ」も「あれ」も英語では *that* である。併し「それ」と「あれ」とには何等か遠近的な區別がある。「それ」は「あれ」よりも言主に接近してゐる。そこで中稱といふのであらうが、「それ」は必ずしも「あれ」と「これ」との間物ではない。場合によつては「これ」よりも「あれ」に接近することもあれば、「あれ」よりも「これ」に接近することもある。「それ」と「あれ」、「それ」と「これ」とが、文脈に於て互に纏れ合ふこともある。兎も角問題の中心は「そ」……の類の解決にあるのであるが、言主を中心とし、距離

的空間的關係を基準として考へてゐる以上は、到底その眞實を捕捉することが出来ないのである。論理的稱格の平面上にはその定位點がないのである。對象論的な頭で掴み得ない稱格でなければならぬ。

倫理的稱格たるべき日本語の稱格代名詞を論理的稱格範疇の平面で一時蔽ひ得たのは自稱、對稱、他稱であつた。併しその瞬間に「こ」「そ」「か（あ）」がその平面から頭角を顯さうとするのである。そこで此の平面を少し中高に膨ませて近稱、中稱、遠稱といふものを立てることによつて、漸くそれらを蔽ひ伏せたのであつた。併し問題はそこで終結しなかつたのである。今度は「そ」……の類が將に此の平面の一方を破つて穎端を顯さうとしてゐるのである。此處に於て論理的稱格と倫理的稱格との矛盾の極限點に立つたのである。之を中稱と言つたのは、その矛盾の上に立ち乍ら之を克服することなくして誤魔化してしまつたのである。總て矛盾といふことは人間叡智に與へられた眞の事實であり問題である。殊に學者といふものは、かゝる矛盾の克服者でなければならぬ。其處に國家の選ばれたる戰士としての意義があるのである。而して矛盾の解決には百尺竿頭一步を進めるといふことがなければならぬ。執はれたり誤魔化したりしてはならぬ。常に舊殻を脱し新世界に出るといふことがなければならぬ。「そ」……の類の解決には、論理的稱格を超えて別の稱格的世界、即ち倫理的世界に出なければならぬ。かくて「そ」……の類の解決を契機として、舊來の論理

的稱格を碎破し、それより上位的な倫理的稱格といふものを求めなければならぬのである。

倫理的世界といふのは行動の世界である。歴史的現實の眞只中である。かゝる世界に於て、我々が眞に直接的に見るものは何であるか。何に面接するか。對話に於ける眞實在は何であるか。それは言ふまでもなく汝に外ならぬ。相手、聞手、對者に外ならぬ。「そ」……の類は實にかゝる汝に關係あるものに就いての指稱である。日本語では、我でもない汝でもない客觀的對象界の中、汝に所屬する領域のものを「そ」……の類の代名詞を以て指稱するのである。汝の所有物、側近物、關係物は「それ」であり、かゝる「それ」と指稱せらるべき事物現象の存在する場所が「そこ」であり、「そこ」への方向が「そち」「そつち」「そちら」である。かゝる「そ」……の類に對し、「いつ」……の類は我に所屬する領域のものの指稱である。即ち我の所有物、側近物、關係物は「これ」であり、「これ」と謂はるべきものの場所が「こゝ」であり、「こゝ」への方向が「こち」「こつち」「こちら」である。又客觀界には我の領域にも汝の領域にも所屬せざる眞の他界、純客觀界がある。その領域に所屬するものを指稱するのが「か(あ)」……の類である。即ち純客觀的事物現象が「かれ」「あれ」であり、その事物現象の存在する場所が「かしこ」「あそこ」「あすこ」であり、その場所の方向が「あち」「あちら」「かなた」である。以上の如く、普通に近稱、中稱、遠稱と謂はれてゐるものの稱格は、實は自己中心的な距離關係を以て意識せられてゐるのではなくて、我と汝との倫理的緊

張關係を尺度として意識せられてゐるのである。自稱に對稱と言つた比例的尺度を以て客觀界を區劃せるものである。自稱の領内、對象的領内、純他稱的領内といふやうに尺度づけたものである。而してかゝる尺度づけは可能なるも、その名目の不明なる領域が不定稱界である。かゝる不定稱界未名目的世界を指稱するものとして、「た」「いづ(ど)」……の類の不定稱代名詞が成立してゐる。

定稱は名目の能不能に介意せず、只客觀界を我と汝との尺度を以て指標せるものであるが、不定稱はかゝる尺度づけを超え、却つて名目の能不能の境に立てる稱格である。故に代名詞は不定稱を契機として、名目の世界を臨んでゐるものと言はねばならぬ。名目の世界といふのは言ふまでもなく名詞的領域である。名目し、名詞が生れるといふのは如何なることか。それは一般的に言へば、稱格的指標がその形式的境地を超えて、眞に客觀的對象界に出て實體的となるといふことである。稱格が不定稱界を超えて、希ひ臨んでゐた眞の實體物の名となるといふことである。併しそれと同時に元の稱格性を失はなければならぬ。否、失はないまでも、それが潜在的なるものとなるのである。かやうな事を日本語の稱格に就いて言へば、倫理的世界から論理的世界に顛落することである。そこに於て、倫理的稱格性は名詞の表面にはないのである。名詞の表は客觀物の名目である。而して稱格性はその裏面に影の如く殘存してゐるに過ぎない。之に反して代名詞といふものは、その表面はどこまでも稱格的であり、名目界はその裏面に映じてゐるに過ぎない。

かやうにして稱格は、代名詞を直接的に表面から範疇づけて居り、代名詞は稱格的要素と言つても差支ない程のものであるが、名詞に對しては代名詞を介して間接的であり、随つてそれは裏面に潜在してゐるのである。故に名詞は稱格的には代名詞に依存するのである。併し何れにせよ、實體語は一般に稱格の表れる範疇と言はねばならぬ。稱格的機能の言語と見なければならぬ。而して之を統率するものは代名詞である。

名詞には如何なる形で稱格が表れるのであるか。之には二つの方向のものがある。其の第一は、所謂形容代名詞の如きものを以て名詞を外部的にカバーすることによつて稱格性を持たしめんとするものである。例へば

この人	この方	この事	この邊
その人	その方	その事	その邊
あの人	あの方	あの事	あの邊
どの人	どの方	どの事	どの邊

の如きものである。併し之は名詞本來の實體性が稱格的に動かされたものではない。只代名詞によつて修飾されたに過ぎず、名詞性そのものは微動だもしてゐないのである。名詞に稱格が表れると言ふには名詞の觀念内容の内部が稱格的に動かされてゐなければならぬ。併しそれは「こ」とか「そ」

とか「あ」とかといふやうなものになつてしまつては無意味である。此處で言ふのはかやうな事を言つてゐるのではない。それは名詞が代名詞に轉じて行く方向であつて、所謂通時言語學的問題に屬するものである。「君」「僕」「私」の如きものはかやうにして出來たものである。併し之等と雖も未だ名詞的色彩が全然排除されたものではない。實體觀念的殘影がある。而もその實體觀念性を殘し乍ら代名詞に轉成したところに意義があるのである。代名詞の倫理的稱格性を顯にして豊富にしてゐるのである。對稱は單なる對稱ではなく、「あなた」とも「あんた」とも「君」とも「お前」とも自由に上下運動をし、自稱も單なる自稱ではなく、「私」とも「わし」とも「僕」とも「おれ」とも動き得る、稱格の倫理性を指點づけてゐるのである。私が今、名詞がその觀念内容の内部を稱格的に動かさなければならぬと言ふのは、かやうな方面に於て動くことを意味するのである。それは全然稱格的要素になり切つてしまふのではない。名詞から代名詞に轉成することではない。名詞が名詞のまゝで、かゝる稱格内の可動的倫理性を顯にすることを意味するのである。之につき今少しく考へて行かねばならぬ。

一體倫理的稱格といふのは如何なることであつたか。それは單に敘述性を明細にせんが爲の論理的稱格と異なるものでなければならぬ。只敘述性を明細にする爲の、男女中性や單複雙數等の如きものと比肩すべき稱格ならば、所謂 *Three dimension* の如きもので事足りるのである。然るに倫理

的稱格は敘述的向論理の爲のものでなく、對話の爲のものである。對話を圓滑自在に運ばんが爲の稱格である。對話的稱格、行動的稱格、向倫理の爲の稱格である。そこに複雑な立體的稱格を要するのであるが、併しかゝる複雑なるべき稱格も、その元を正せば一に歸着するのである。此の一を理解體得しさへすれば、日本語の稱格は如何に立體的に複雑を極めてゐても、その倫理的文法機構が外觀上如何に困難と見えても、案外たやすく掴み得ると思ふのである。それは言ふまでも無く汝に對する心遣である。之は日本人の眞に偽らざる倫理的精神であり感情である。日本人の倫理的な長所も缺點も一に此處から發出するのである。而もそれは如何ともすることの出来ない運命でもある。之を若し性急に矯めんとすれば角を矯めて牛を殺すの諺の如く、日本の歴史的生命的方向を否定する惡業でなければならぬ。倫理的文法機構の眞義を捉へ之に習熟せんとするには、先づかゝる汝に對する心遣汝性といふものを眞に身につけ、眞の日本人になり切らなければならぬのである。かやうな汝に對する心遣が先づあつて我に對する心遣が決定せられ、而して對象界をも汝の領域、純他界といふやうに尺度づけてゐるのである。汝に對する心遣には時と場合とによつて種々あるであらうが、汝に對する尊敬の念はその最も特徴的なもので、又善美なるものである。かゝる汝に對する尊敬は、我に對する心遣として謙讓の念を伴ふのである。更に進んでは、汝に所屬する領域内のものにも尊敬の念を含め、かくて我に所屬する領域内のものにも謙讓の念を含めることとなる。

嚮に名詞が名詞本來のまゝでその觀念内容が稱格的に動かされると言つたのは、かやうな尊敬と謙讓の意を表すことに外ならぬ。それは單なる尊敬謙讓の意味表示ではなく、かゝる倫理的稱格の爲の工作でなければならぬ。對稱とか自稱とかが一點に固着せるものでなく、それが汝に對する尊敬の心遣、引いては我に對す謙讓の心遣と言つた可動的倫理性を内容とせる點を指摘せんが爲の稱格的工作でなければならぬ。かゝる工作には種々のものがあるが、之を敬稱、謙稱と稱するのである。併し之等に對し、反對に對者を侮蔑し自己を尊大にせんとするものも場合によつてあるのである。之を今假に侮稱、慢稱として置く。

名詞に對し以上の如き意味の稱格を表さんとするには、先づ最も一般的な方法として種々の接辭を添加して行くのである。例へば

(接頭辭の添加)

お顔 お名前 お子 お宅 お手紙

み心 み位 み代 み衣 み氣色

おみ足 おみ帶 おみおつけ おみおなか

おん事 おん身 おん禮 おん品 おん涙

おほみ心 おほみ歌 おほみはからひ おほみわざ

ご本人 ご老體 ご注意 ご機構 ご用 ご門

(接尾辭の添加)

天子さま 神さま 殿さま 御前さま 松本さま

叔父さん 姉さん 大工さん 船頭さん 山本さん

少佐どの 太郎どの 三郎どん お竹どん

山中くん 次郎くん 姉ご 娘ご 嫁ご

太郎め 田中め 小僧め 弱虫め 馬鹿め

(接頭辭と接尾辭との添加)

おかあさま お嬢さま お醫者さま

おん伯父うへ おん伯母うへ おん兄うへ

ご尊父さま ご隠居さま ご新造さま

おとうさん おばあさん お子さん

お松どの お竹どん

次に本來的に尊敬謙讓等の意を具する語を用ひて行くものである。之は一般的には

旦那様 奥様 先生 師匠

親父 倅 家内 やど

野郎 奴 餓鬼 非人

の如きもので、極く少いのであるが、只皇室に關するものと書翰文に關するものとは我が國で特別に發達してゐる。先づ皇室に關するものに就いて考へてみよう。

我が國に於ける皇室と臣民との關係は、永世代々に君民一體的であり、而もその間に君と臣との別が明かでなければならぬ。天皇は臣民をおほみたからとして限り無き愛撫を垂れさせ給ひ、臣民は赤子としてその御仁徳を仰ぎ奉る皇室中心の國家的家族體であるが、そこに當然大義名分といふものが明かにされてゐなければならぬ。君は君たり臣たりといふ君臣の分が明かでなければならぬ。天皇の御存在は現人神として、歴史的生命的の根元として絶對的である。親子の關係であると同時に神人の關係でなければならぬ。かゝる大義名分の文法的表れとして皇室に關する稱格が特別に發達してゐるのである。故に皇室に關する稱格といふものは、倫理的稱格の極限であり、倫理的文法機構の最高最至の絶對的部分でなければならぬ。倫理的稱格は我が國民道德、日本臣民道の眞の表れである。それは親子の關係、長幼の序、夫婦主従の關係、朋友の信愛、その他社交萬般に及び、實に我が國億兆を結ぶ和の規格である。而してかゝる億兆が一心一體となつて、皇室に奉仕する忠誠の迸が特に皇室敬語を發達せしめてゐるのである。人の和の稱格の上に神人合一の稱格がその絶對

者として天日の如く輝いてゐるのである。かやうな皇室に關する稱格として發達した名詞は枚舉に違がないが、例へば次の如きものである。

天皇 皇后 皇太后 太皇太后 皇太子 親王 內親王 王 女王

主上 至尊 君 陛下 殿下 宮

叡慮 叡威 聖旨 宸襟 宸翰 天恩 叡覽 台覽 親閱

上聞 天顏 龍顏 行幸 還幸 行啓 還啓 御幸

以上のやうな皇室敬語に關連するものとして、軍部官僚或は封建時代の諸公武家、更に藤原時代の宮廷公卿等の間の階級的稱格とも言ふべきものもある。併し之等はどこまでも皇室に關する稱格を背景とし、その周邊的なものとして發達してゐるのである。絶對的稱格の單なる餘波に過ぎなかつた。蘇我の入鹿父子、道鏡や將門の徒輩が時に之を侵さうとしたやうなこともあつたが、忽にして消滅せざるを得なかつたのである。言語は人倫の樞機である。殊に倫理的稱格は寸分須臾も疎にしてはならない。それは眞の國民的體制の髓であり歴史的社會的現實の綱紀である。國民精神鍊成の肝要は先づかゝる倫理的稱格を正し、その習熟に在ると言はねばならぬ。

かゝる倫理的稱格に於ける修鍊は古來書翰文に於て異常的に行はれた。隨つて之に對する名詞は語彙的に豊富な漢語を借用し或は再造して、煩瑣なまでに發達してゐるのである。一體書翰文とい

ふものは書記せらるゝ對話である。勿論原則として、如何なる立言も作文も對話性ならざるものはないのであるが、書翰は直接的に對話性である。然も思索せられた對話であり、鍊り鍛へられた對話である。構想的對話、推敲的對話である。面談に於ける對話の如く即興的拙速的ではなく、熟慮的巧遅的である。そこに稱格の如きものは異常的な發達を遂げて行く譯である。併しその極、候文の如きものは動もすると儀禮的形式的に墮し、徒に漢語を以て蔽ひ繁文縟禮に流れ、對話の眞生命を失ひ國民精神から遊離する結果となる。候文は武家を世界として發達したもので、その當初に於ては簡素にして質實雄勁なる文體であつたが、その末路といふものはかやうなところにあるのである。併しかゝる書翰文に於て、倫理的稱格を極めて豊富なるものに發達せしめた點は今日と雖も大いに認めなければならぬ。その雄勁なる文體と共に倫理的稱格の幅廣さは取つて以て範としなければならぬものは多分にあると思ふ。今その例を示せば

「敬 稱」

(對 稱)

貴殿

貴兄

貴君

貴女

貴官

貴僧

尊兄

尊公

尊君

諸君

諸賢

諸子

(準對稱)

	○貴意	貴慮	貴志	尊意	尊慮	尊見
	高說	高意	高慮	芳情	芳志	芳慮
	○貴聞	高聽	尊覽	賢覽	電覽	
	○貴命	芳命	賢命	高配	高庇	海容
	示教	來示	來翰	貴恩	惠投	
	賁臨	尊來	光來	枉駕	來車	來駕
	○尊體	尊顏	尊容	貴影	尊影	
	○尊姓	尊名	芳名	高名	貴名	芳聲
	○貴札	貴翰	貴墨	貴書	尊札	尊翰
	芳札	芳墨	花牘	華墨	尊簡	尊紙
	○芳詠	芳韻	玉詠	玉韻	玉稿	高著
	○尊父	尊兄	尊大人	令夫人	令閨	北堂
	貴息	賢息	賢弟			
○貴家	貴邸	貴店	貴行	貴廳	貴社	
尊家	尊宅	尊邸	尊堂	高堂		

「謙稱」

○貴國 貴地 貴所 貴鄉 貴府 貴港

(自稱)

小生 拙生 愚生 野生 迂生 生
拙者 小子 小弟 小妹 下名 不肖

(準自稱)

○寸懷	鄙懷	微意	微志	微衷	愚見
○拜見	拜讀	拜誦	拜承	拜聞	拜察
○進上	進呈	呈上	拜呈	獻上	獻呈
啓上	拜眉	拜顏	拜芝	參上	參堂
○粗膳	粗餐	粗茶	粗品	粗飯	粗菜
薄謝	薄儀	薄膳	寸志	不腆	
○寸書	寸簡	寸札	寸楮	愚札	愚翰
○拙筆	愚筆	亂筆			
○拙歌	拙詠	拙吟	拙文	拙作	拙稿

○愚父 愚母 愚兄 愚弟 愚妻 愚息

拙父 舍兄 舍弟 荆妻 豚兒

○拙宅 拙家 拙店 茅屋 小店 弊宅

弊家 弊居 弊館 茅屋

○弊國 弊地 弊郷 弊村 拙地

右の如く、書翰文に於て我が國の稱格はその極限にまで發達したと言つてよい位、微細な種類別があるのである。心の内部から、感覺、生理、言語、態度、容姿、作品、姓名、物品、親族、住居、土地に至るまで一切の關係物に對して稱格づけをしてゐるのである。それらの中、最もこゝで注意しなければならぬことは、かゝる名詞に於て、敬稱の中に他稱が獨立し、謙稱の中に自稱が獨立してゐることである。それは如何なることであるか。一體名詞は如何なる範疇の語であつたか。それは代名詞的稱格性が潜在的となり、實體觀念の表示がその表面に立てるものである。代名詞といふのは不定稱を契機としてかゝる名詞に裏附けられ、専ら自稱對稱他稱等の如き稱格的識別の範疇であつたが、名詞は之と反對に代名詞に裏附けられ、専ら實在的對象界を様々に名目づける範疇である。然るに此の書翰文に於て發達せる稱格を見ると、單なる名詞本來的な稱格的識別、即ち敬稱謙稱に於て微細なる區別を爲したといふのみに止まらず、その餘り、代詞的な稱格識別である對稱自稱と

いふものが、種々の他稱的なものから明瞭に獨立してゐるのである。即ち名詞的なものが代名詞の領域内へ侵入したものと云はなければならぬ。書翰文に於て、名詞が名詞本來の敬稱謙稱で満足することが出來ず、更に代名詞的な自稱對稱他稱の區別にまで發展し、不知不識の間に代名詞的なものになつてしまつてゐるのである。その爲自稱對稱の代名詞中には、名詞的色彩を多分に持ち、敬稱謙稱を明細に區別する新代名詞、或は僞似代名詞が入込むこととなり、此處に於て自稱對稱の代名詞は從來よりも其の稱格性を幅廣く持つ結果となるのである。倫理的可動性が明細に指標づけられることになるのである。

勿論かやうな事は書翰文から來たもののみが其の原因となる譯ではない。それは自然的對話現象に於て、かやうな嚴しいものではなく、素朴ではあるが、もつと和やかな圓滑なものが成立してゐるのである。それは先づ第一に、前にも多少觸れて置いた「私」「僕」「君」「お前」などのやうなものが名詞から轉じて代名詞の自稱とか對稱とかといふものになつて居る。次に他の稱格の代名詞を自稱や對稱に流用するのである。例へば反射指示と稱せられる「おのれ」とか自稱の「われ」などを對稱に用ひると相手を侮蔑した言ひ方になる。他稱の「これ」「いつ」「こち」「いつち」「いちら」の如き準自稱的なものを自稱に、「それ」「そい」「そち」「そつち」「そちら」の如き準對稱的なものを對稱に流用することも出來る。又之等は事物場所を指示する他稱であつたが、方向を示す「こな

た「そなた」「あなた」の如きものを對稱に用ひると、相手に對し敬意を含む言ひ方になる。その中「あなた」の方は表示目的に最も恰當してゐる點から、今は「あなた」から「あんた」の如きものを派生せしめ、最もよく使用せられるのである。更に既成の代名詞に接辭「さま」「さん」などを添へて、例へば「あなたさま」「いなたさま」「こちらさま」「お前さま」「お前さん」の如く、一層丁寧な敬意を表すことが出来る。さうしてかやうなものが、例へば

……(あなた)＞(あんた)＞(君)＞(お前)＞(そつち)……
……………(私)＞(わたし)＞(僕)＞(おれ)＞(こつち)……

の如く、稱格内の倫理的可動性を出来るだけ明細に指標づけようとしてゐるのである。そこへ書翰文中特別に發達した自稱的なもの對稱的なものが入込み、一層複雑な内容となつた譯である。

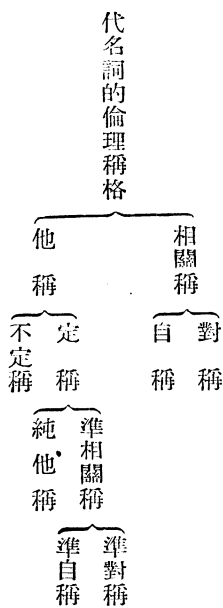
以上の如く稱格代名詞によつて指標されてゐる稱格に種々な名詞的干涉があつて、稱格内容が幅廣く明細に表示されるのであるが、かやうなことは如何なることであるか。私はそれは決して稱格の本質そのものが動かされるのではなく、只外から扮飾しその稱格の本質を顯にする二次的現象に過ぎないものと考へる。稱格そのものの動きではなく、稱格に従屬するものの動きであると思ふ。謂はゞそれは稱格にとつては語彙的事實に過ぎないのである。稱格的語彙に異動あるだけである。稱格に對する衛星的運動に過ぎない。而して更に言へば代名詞それ自體の如きものと雖も眞の稱格

實體ではない。矢張稱格的語彙の一種である。本來的原本的な代名詞と見られる「わ」「な」「こ」「そ」「あ」の如きものでも眞に稱格と即一したものでなく、實體物的色彩が殆んど捨象され純粹なるもの例へば物的對象界に於ける數の如きものとなつたのである。代名詞方向といふものは常にかやうなものでなければならぬ。例へば現在盛に行はれてゐる「君」「お前」の如きも、入込んだ當初は極めて高度な敬稱であつた。それが漸次眞に對稱的になり切つて行くと同時に、元の敬意が稀薄となり今では自分より目上の人には決して使はれない。「貴様」の如きはその最も極端な例である。「僕」の如きも自稱に用ひられた最初は極めて謙虛な意味を表してゐたが、今は「君」に對する「僕」である。「あなた」や「私」は異なる道を進んだ。それは「あんた」「わたし」などの派生語を出し自身は略元の座に止まつてゐるのである。かやうに代名詞が次第にその内實的なものを失つて行くといふことは、裏面的な名詞面から見れば退化であるが、表面的な代名詞面から見れば進化であると言はなければならぬ。代名詞の代名詞たる所以は實體物表示の抽象否定にあるのである。而して残る本質部分は自稱、對稱、他稱などといふ行動的世界の單なる指標性である。併し眞の稱格といふものは實はかゝる代名詞實質にも依存してゐるのではない。寧ろ無くても濟むのである。否、あからさまに事々しく我汝彼と區別立をするよりも、言はない方が却つて効果的である場合がある。そこに省略といふものの意義があるのである。然らば何が爲に代名詞或は名詞に於て稱格を立てる

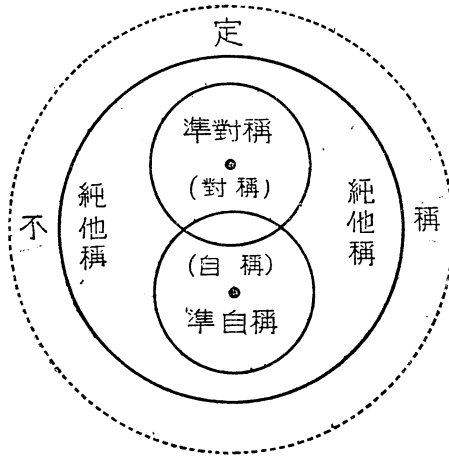
のであるかと言へば、それは對話内容を形造るべき敘述性からの要求である。

二

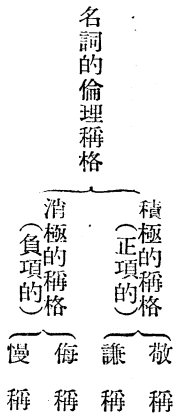
倫理的文法の基礎的事實は對話に於ける稱格である。倫理的稱格である。それは行動的世界に於ける我と汝と環境物に對する眞實な行動的位格づけがその根本となるのである。歴史的社會的現實に於ける眞に具體的な倫理的 world 觀の圖式であり規格である。かやうなものが代名詞的には



の如き稱格範疇として表れ、それらは



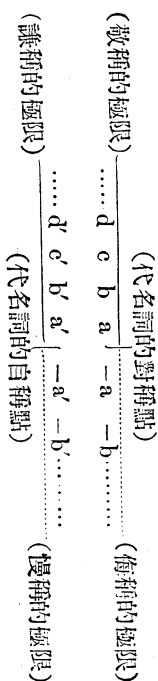
の如き關係に在るものである。而して名詞的には



の如き範疇として表れて居る。而して對稱的なるものは敬稱的極限から侮稱的極限に廣がり、自稱的なるものは謙稱的極限から慢稱的極限に廣がり、それ／＼廣大なる倫理的可動領域を有するので

ある。

〔對稱的可動領域〕



〔自稱的可動領域〕

而してかゝる廣がりの各點は、對稱的なるものと自稱的なるものとの間に

$a : a', b : b', c : c', d : d', -a : -a', -b : -b'$

と言つたやうな對應的緊張を持つのである。例へば「君」と「僕」、「あなた」と「私」の如く、そこに倫理的緊張關係といふものがあるのである。

右の如き倫理的緊張、或は稱格的緊張關係といふものが倫理的文法の事實を成立せしめるのである。即ち我と汝との張りが様々に敘述面に與へる變化相が倫理的文法の事實である。而もかゝる文法事實の本體は敘述面に表れた形相そのものでなく、かゝる形相の成立因である稱格的張り合である。倫理的世界觀、或は倫理的緊張關係である。本體は敘述面に表れないところにあるのである。

倫理的文法機構では敘述面上に表れた記號的繋りは却つて二次的副次的なものである。併し私が今

かく言ふのは勿論敘述面的なものを否定したり輕視したりしようとするのではない。それどころか、敘述面的對應があればこそ倫理的文法機構といふことが言ひ得るのである。倫理的緊張に對しかゝる敘述面的對應がなかつたら、文法機構どころか、所謂言の言語學的なものとして取扱つて行かねばならぬのである。とは言へかゝる敘述面的變化相は倫理的文法機構そのものではない。倫理的文法機構の全景觀は謂はゞ劇的である。敘述面的變化といふのはその臺詞の如きものに過ぎない。それは聞手と話手と、それから聞手の領界と話手の領界と純他界とを環境とする、對話的世界の力學に専ら支配せられてゐるのである。敘述面に表れたものはかゝる對話的世界の倫理的力學の形態に過ぎない。故に倫理的文法から言へば敘述面は常に省略法的である。それは倫理的緊張關係の表示、即ち形態的部分の指定をするだけで、後の主要なる部分は總てその對話の力學的な場に任せるのである。主格とか補格とか述格とかといふものは敘述の向論理性が要求するのである。對話性やかやうなものの完備如何といふことには一切おかまひ無しである。對話性が極端に進むと、目で物を言つたり願で人を使つたり默許したりさへする。故に言の内容が複雑であるとか、曖昧に陥る心配があるとか、其の他特別な場合の外は、敘述面は決して完備するものではない。倫理的文法から言へば省略法的であると言ふのが普通なのであつて、寧ろ省略法的でない方が特例であると言はなければならぬ。

敘述面的變化相は倫理的緊張關係を表示し、倫理的文法機構の形態的部分と考へなければならぬが、それは具體的には如何なることであるか。之に就いて二つの方面から考へ得ると思ふ。それは第一に、言主の發する敘述の全機構そのものが、言主と聽主との間に醸されたる倫理的緊張關係の表示であると言ふことである。第二にその機構内部の組織に於て、更に言主が聽主に執れる倫理的緊張關係が表示されてゐることである。例へば

私があなたをお捜し致しました。

あなたが私をお捜しなさいましたか。

などの話に於て、先づ實在の言主と聽主との對立が原本的事實である。而してかゝる我汝の對立的緊張關係が右の様な形の話線を成立せしめたのである。故にその話の全機構といふものが、此の場合に於ける我汝の倫理的相關々係の能記的なものと見ることが出来、随つて倫理的文法の形態と考へることが出来るのである。併しかゝる全話線が形態と見られなければならぬことをだん／＼突詰めて行くと、多くの場合、結局は「ました」「ましたか」などといふやうな話の最後に來る助動詞の如きものの力に歸着するのである。

おれはお前を搜した。

お前はおれを搜したか。

に於ても、話全面が「おれ」「お前」と言つてゐる兩者の實在的相關々係の能記物であるが、之を更に端的に一括的に示してゐるのが、最後の「た」「たか」であると言へる。故に第一の事實に於ける考察の射程は主としてかやうな「ました」とか「た」の如きものに在るのである。次にかゝる話に外在する實在的我汝の對立が、敘述の内部機構として表れたものであるが、それは前の例で「私があなたをお捜し致し……」「あなたが私をお捜しなさい……」或は「おれはお前を捜し……」「お前はおれを捜し……」の如き部分である。此の「私」「あなた」「おれ」「お前」は皆實在的我汝ではなく、敘述内に表れた我汝である。敘述化され論理面に映じた我汝である。前の場合は對話の原本性そのまゝのものであるから、我汝の對在性は常にその實在に於て見出さなければならぬのであるが之はかゝる原本的對話性が敘述面に横倒しに上映されたものと見るべきものであるから、必要に應じかく我汝的な主體が表れて來るのである。併しそれは敘述性からの要求であつて、何等その必要な場合は常に省略的である。故に敘述が必ずしも主格の共立を要しない日本語の如きものにあつては、主格の省略などといふことは寧ろ普通である。『倫理的文法の立場からはあらでもがなものものであると言ひたい。それには嚴とした實在的我汝の對在が、敘述面の映寫幕にこそ現れないが、ちやんと控へてゐるからである。それよりも、かゝる我汝的對立「私があなたを」「あなたが私を」「おれがお前を」「お前がおれを」の如きものの倫理的緊張關係を表示する「お捜し致し……」「お捜し

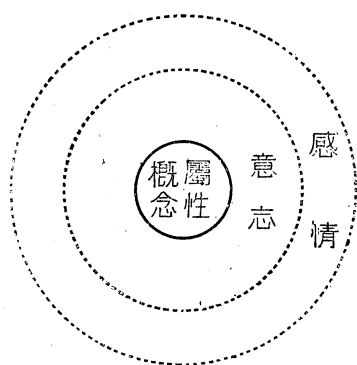
なさい……」「捜し……」の如き述格的部分が重要と言はなければならぬ。随つて第二の事實に於ける考察も、その射程は主としてかやうな述格的部分に在るのである。

今以上の如き考察に入る前にも一つ一般的な事柄に就いて吟味して置かなければならぬ。それは右に舉げた論理的文法機構の形態とも見るべき敘述面中、その中心的なるものは、外的内的何れから見ても總じて述格的部分である。之は敘述機構の中樞部位は述格的部分であらうから當然な事であらうが、併しその述格的部分にも又種々のものがある。特にそれを敘述内容と敘述形式に分つことが出来る。意義部的なものと形態的なものに分析することが出来る。論理的緊張關係の眞の表示はその何處に於て行はれるのであるか。前者であるか、後者であるか、將又その全體であるか。勿論全體であると言へば當らずと雖も遠からずで、先づ難がないであらうが、かゝる種類の解答は多くは解答に價しないものである。然らば二者何れか。それは同じく形態的であるところから、後者の如くにも考へられないこともないではないが、遺憾乍らそれでは誤魔化しである。と言ふのは論理的文法形態は論理的文法形態に合致し得ないからである。兩者は明かに區別せられなければならぬ。論理的文法形態は敘述面に於ける要素間の連續斷止に對する能記であり表示である。然るに論理的文法形態は、かゝる敘述面を超克せる對話的現象に於ける我汝的緊張關係に對する能記であり表示である。かやうな兩者は如何に縮小しても廓大しても合致することの出来ないものでなければならぬ。

ばならぬ。兩者は次元を異にしてゐるのである。然らば意義部的なものがそれであるか。併し單なる意義部は倫理的文法の形態部ではない。それは外向的指標でなければならぬ。形態部は言語主觀的內向物の指標であるが、意義部は之と直交する言語に對し客觀的な外向物に對する指標でなければならぬ。然らば何であるか。意義部と形態部の中間地帯であるか、或は兩者の重なる如きものか折衷物か。併し意義部と形態部との間には實際は何物もないのである。兩者は絶對否定を隔て、對立してゐるものでなければならぬ。形式上さやうな事が想像されても、そこには何等然考へらるべき自律物がないのである。意義部なるか將又形態部なるかである。然も倫理的文法形態は論理的文法形態に超越的でなければならぬ。多少とも合致するとか混同するとかといふことがあつてはならぬ。

それでは無意味である。故にどうしてもその意義部の中に住地を求めなければならぬのである。一體名詞の稱格といふものは如何なるものであつたか。日本語の名詞はそれ自體として形態部的なものが顯れて居らぬのであるから、稱格の顯現はその意義部的なところに依るより外仕方がない。敬稱とか謙稱とかといふことはかゝる意義部の動きに外ならない。その極「君」とか「僕」とか「私」などのやうに、殆んど名詞的意味を無くしたもののさへある。「君が代」の君と「君の帽子」の君、「從僕」の僕と「僕の本」僕「私上の事」の私と「私の顔」の私、それらは同じ共時的事實であり乍ら通時的にはひどく引離されてしまつた。兎も角名詞に於ける稱格の顯現は意義部の動きである。中核的意

義部に外殼的意義部が生じて行き、そこに敬稱とか謙稱とかといふものが成立したのである。倫理的な文法形態も述格的部分のかゝる外殼的意義部、或は緣量的意義部と見なければならぬでなからうか。敘述的意義の周邊のなとこに見出さなければならぬのでなからうか。敘述的意義部の周邊が倫理的緊張に即應して種々に變曲することが、倫理的な文法形態の姿でなからうか。併し私は單にそれだけでは未だ眞に倫理的緊張を表示することが出来ないと思ふ。倫理的緊張といふのは單なる關係ではなく動的關係でなければならぬ。數理關係とか論理關係などの如く靜的傍觀的でなく力的行動的でなければならぬ。知的關係ではなく意志的關係である。故に敘述的意義部の周邊と言つても形容詞の如きものでは不適當である。形容詞の意義的構造は知的な屬性概念の周邊を情的主觀が

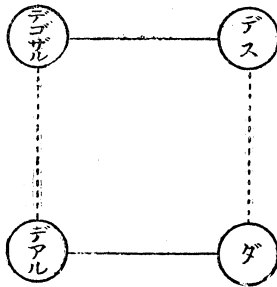


繞つてゐるに過ぎない。どうしてもそれは動詞的なものでなければならぬ。動詞の意義部は、其の間に種々の程度があるが、何れも動的力的意志的である。動詞の意義的構造は大略上圖の如くである。現象的であり事行的である。倫理的緊張關係の眞の表示部分、眞の形態部と言へば、かゝる動詞的意義部の周邊でなければならぬ。

かゝる倫理的な文法形態の第一類とも言ふべきものは、現に對在してゐる我と汝との倫理的緊張を直接的に表示するものである。之は

更に二つの範疇に分つことが出来る。その第一は形式動詞の上に表れるものであり、第二は助動詞の上に表れるものである。形式動詞といふのは敘述内容が形式的となつた動詞である。それは存在動詞をすら超えたものと考へなければならぬ。存在動詞は存在といふ概念内容を實質的に保有するのであるが、形式動詞はかゝる一般的なものをすら捨象してしまつた純粹動詞である。それは周邊的意義部だけしか保有しない動詞と考へなければならぬ。動詞性のみを抽象せられたる動詞である。併しかゝる形式動詞を助動詞と混同してはならぬ。助動詞は動詞の周邊的意義を延長し助長するための要素で周邊的意義のみを表示する形式動詞と全く異なるものでなければならぬ。のみならず助動詞は周邊的意義助長顯現の具として、その意義内容は形式動詞の如く抽象的形式的一般的でなく具體的實質的特殊的でなければならぬ。形式動詞が體言副詞、或は形容詞などと合一して動詞的敘述語を成すのは、かゝる助動的なるが爲でなく形式的に周邊的意義のみ表示する動詞なるが爲である。動詞性のみを抽象されたる動詞なるが爲である。更に言へば只管意志表現を爲してゐるからである。純粹動詞なるが爲である。助動詞といふのは、動詞に於けるかゝる形式動詞の意義内容の如き動詞性を特殊化し分化發展せしめる具に過ぎない。併し又、例へば形容動詞などの如きものの語尾とか接辭とかといふものでもない。語尾は形態部であるが形式動詞は形式的ではあるが意義部がある。接辭は最も近いものであるとも考へられるが、接辭とも實は異なるものである。接辭の意義

部は常に實質的である。それは何等か特殊な概念的なものを持つてゐなければならない。その點は寧ろ助動詞に似てゐるのである。かやうに形式動詞といふものは、上は存在動詞の如きものから一切の實質動詞と異なり、下は助動詞、接辭、語尾などとも異なる純粹なる動詞である。かやうなものに先づ倫理的緊張關係が表れるのである。之には「だ」「です」の如く緊密に一語となつてゐるものと「でゝある」「でゝござる」の如く形成過程的なものとある。併し前者も後者もそれ／＼意味があつて存在してゐるのであつて、前者がよくて後者がどうかと一概に非議し去るべき性質のものではない。右の中「です」「でゝござる」の如きものは言主が聽主に敬意を拂ひ自身が謙遜すると言つた正項的な倫理的緊張關係を表示し、「だ」「でゝある」の如きものは、言主が聽主に對し尊敬の念を持つとか謙讓するとかと言ふやうな心遣が殆んど拂れず、時には却つて相手を見下げると言つた負項的な倫理的緊張關係を表示する。



第二の助動詞の上に表れるものと言ふのは、現代口語では「ます」の一語である。之は言ふまでもなく動詞の連用形に連なつて行くものである。例へば

私は大阪へ行きます。

明朝参りませう。

もうそろ／＼始めましてよろしくございますか。

私が参りますると大變喜ばれました。

あなたに來て戴きますすれば大助りですが。

おや、ここにありましたよ。

一體形式動詞は動詞以外のものが動詞的敘述をする必要ある場合の爲の特殊な動詞として成立せるものであり、而してかやうなものの上に倫理的緊張の正負的識別の爲「です」「でござる」に對する「だ」「である」と言つた對立があつた。然るに「ます」の方は動詞全面にかゝる正負的識別を與へんが爲に成立してゐるのである。即ち「ます」を用ひたるものは、言主が聽主に敬意を拂ひ且自身を抑損せる正項的な倫理的緊張關係を表示し、「ます」を用ひざるゼロ記號的なものは、かゝる敬虔な心遣が拂れず、動もすると相手を下に見ると言つた負項的な倫理的緊張關係を表示することとなる。併し此處で最も注意を拂ふべき事は、「ます」は動詞に連なる助動詞であると言ふことか

ら、單に前に擧げたやうな實質動詞ばかりではなく、形式動詞にも連なる可能性があると云はねばならぬことである。然るに形式動詞の中で、響に示した圖の右側に位置する「だ」です」には「ます」が連ならないのである。之の理由は色々あるであらうが、兎も角それは形式動詞としての極限點にまで到達して居る語であるからである。之以上に進めばも早それは助詞の如きものになるであらう。随つて「だ」です」はそれで倫理的緊張表示の限界に達してゐるものと言はなければならぬ。所が響の圖の左側に位置する「で」ある」「でござる」には「ます」が連なつて、「であります」「でござります」或は「でございます」などといふ形が成立するのである。此處に於て、第一類の倫理的文法形態といふものは次の如きものであると思ふのである。

イ、だ(ぢや・や)

ロ、徒

ハ、でーある。

ニ、です。

ホ、でーござる(でーござい)

ヘ、でーあります。

ト、徒ーます。

チ、でーございます（でーござります）

右の中「徒」といふのは實は本居宣長の「はも徒」の徒に習つたもので、倫理的文法形態がゼロ度であるといふ意味であり、そこは主として實質動詞の存在を指してゐるのである。而してロの「徒」は場合によつて「だ」と等價であり、又「でーある」と等價のこともあるから餘り特徴のないものである。トの「徒ーます」も同様「でーありーます」と「でーございます」との間を往來するもので、殊更舉げなくてもよい程のものである。そこで結局倫理的文法形態の第一類とも言ふべきものは、「だ」「である」「です」「でござる」「であります」「でございます」の六種類となるのである。この六種類中「です」から「でございます」までの四種は所謂崇敬體を形造るものであつて、倫理的緊張關係から言ふと正項的積極的なものである。之に對して「だ」と「である」とは通常體を形造るもので負項的消極的である。明治初年の作家などが、從來の文語文を棄て、口語を以て創作を始めようとした際、よく「だ調」とか「である調」とか「です調」などといふことを問題にしたが、之等も矢張り作家が讀者に對してとる倫理的緊張關係を問題としたものである。我々が日常の談話を行ふ場合にも先づかやうな配意が爲されるのである。自分が今語らんとする話線を、「です」調子にするか「であります」で統一するか、それがうまく對者への客觀的倫理射程に合致しなければならぬ。さうして若し合致しないやうなことが意識されたら、話の中途でもその彈着目標に

命中するやう之を修正して行くのである。兎も角この六種類を然るべく使分けることが對話行動に於て先づ來るべき技術問題でなければならぬ。而してその何れを取り何れが使はれて行くかと言ふことは、敘述論理の爲でもなく審美的扮飾の爲でもなく、常に對者との間に醸される倫理的緊張關係が之を決定して行くのである。語る我が聞く汝に對する倫理的緊張關係の表示物、倫理的文法の形態といふ立場に於て定つて行くのである。巧言の爲でもなく令色の爲でもなく、實に仁の立場に於て形造られるものでなければならぬ。我と汝との對立的緊張といふのはかゝる仁の現實態でなければならぬ。そこに眞實なる形態が決定せられて行くのである。

(敬の極限)						(侮の極限)	
.....							
d'	デゴザイマス	d					
c'	デアリマス	c					
b'	デゴザル	b					
a'	デ	ス	a				
(我)		-a'	デア	ル	-a	(汝)	
		-b'	ダ		-b		
.....						(慢の極限)	

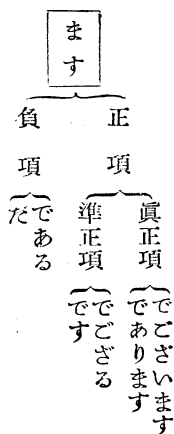
$a : a' = (\text{デス}) \quad b : b' = (\text{デゴザル}) \quad c : c' = (\text{デアリマス}) \quad d : d' = (\text{デゴザイマス}) \quad -a : -a' = (\text{デアル})$
 $--b : --b' = (\text{ダ})$

對話に於ける實在言主と聽主との倫理的緊張關係に對應する文法形態は、現代普通口語に於ては大體以上の六種であるが、其の中「ます」を接合する一連は最も積極的なものと言ふべく、隨つて現代口語は「ます」の一語を以て特徴づけることが出来るのである。現代は「ます」言葉の時代であり、現代口語は「ます」體であるとも言へる。かやうな事は書翰文のことを今日候文とか候文體などと言ふのと同様である。而してこの候文と言ふのは「候」によつて統一づけられた一連の倫理的文法形態を持つ文體のことである。「候」による倫理的文法形態は、主として中世武家の間に於て發達したもので、鎌倉室町江戸にかけて七八百年もの長い間、下層的に成立してゐた現代口語の源流をなす所謂俗語に對し、上層的標準的なものとして盛行はれてゐたものであつたが、明治以後は「ます」言葉が標準口語として採用せられ、國語の上表部に浮び出るやうになつてからは、漸く特殊なものとして跼蹐してしまつたものである。「候」による倫理的文法形態以前は、大體に於て平安宮廷を中心として發達した「侍り」言葉であると思ふ。併し「侍り」の外に「たまふ」とか「さふらふ」とかといふものもあるが、前者は用法が限定せられて居り、後者は未だ充分に習熟されてゐなかつた。それ以前の大和奈良はどうであつたらうか。之は對話的文獻が少いから確かなことは言へないが、只祝詞宣命などに表れてゐるものから推察すると、「まつる」でなかつたかと思ふのである。兎も角かやうな「ます」とか「候」とか「侍り」とか「奉る」などといふ倫理的緊張表

示の中核的なものは、その時代の倫理的文法機構の生命を成すものであるから、慎重に調査し、之を鍵鑰としてその倫理的文法を體系づけなければならぬ。

三

「ます」に統率せられた一連の倫理的文法形態は、言主が聽主を尊敬し、或は侮蔑し自身を抑損し或は高揚してゐるが爲に、語らんとする敘述の全面に與へる倫理的緊張表示の輻輳するところである。對話の要である。故に日本語に餘り習熟して居らぬ外國人でも、その言葉尻をさへよく押へて行けば、言主が自分に如何なる心的態度を持してゐるか、如何なる倫理的待遇を爲してゐるかといふ言語行動の根本を掴むことが出来るのである。敘述の内容などは物事を只指點するだけでも事が足りる。それを自國の言語論理によつて組合せても大體想像がつくのである。所謂身振語といふものはさやうなものである。勿論そこには表情的なものをも勘定に入れなければならぬが、兎も角倫理的文法機構の眼とも言ふべきものは「ます」に統率せられたる



の如き一連の文法形態でなければならぬ。而してかゝる根本的なものが敘述の上に詳細に表れるところを知らんとするには、第二の機構内部に表れる言主の倫理的・世界觀の在處を探究しなければならぬのである。

敘述の機構内に表れる倫理的緊張關係表示の中心點は前にも述べて置いた通、動詞でなければならぬ。然も形式動詞ではなく實質動詞でなければならぬ。存在動詞以上のものでなければならぬ。而してかゝる實質動詞の形態部でなく意義部でなければならぬ。意義部と言つても概念的表示部、即ち「行くこと」「來ること」などといふやうに抽象される知的部分對象の部分ではなく、動詞特有の意志力を表示する部分でなければならぬ。外殼的意義部、緣量的意義部でなければならぬ。故に敘述内部に表れる倫理的・文法形態の中心課題は、倫理的緊張關係に即應してかゝる外殼的意義部が如何に變形するか、如何なる形態的工作が可能であるかと言ふことでなければならぬ。

かゝる第二類の實質動詞の外殼的意義部の變化は第一類のものに比して極めて複雑である。それに就いて先づ考へなければならぬことは、第一類のものの統一範圍内に於けるものと、第一類の統一範圍を超越してゐるものとあることである。即ち言主が先づ聽主に對する倫理的配意により「ます」に統率された種々の倫理的・文法形態を用ひるのであるが、敘述内部の倫理的・文法形態がかゝる第一類的な倫理的・文法形態に呼應し統一せられる一般的なるものと、然らずして「……でございま

す」であらうと「……です」であらうと「……だ」であらうと、敘述内部では獨自な倫理的文法形態をとつて行く特殊なものがあるのである。前者は例へば

私はこの二、三日出張致してをりました。

父も大變喜んでをりました。

あなた様には如何お暮し遊されますか。

御兩親も随分御心配なさつて居られるやうです。

の如く、敘述の主格が自稱的なもの、準自稱的なもの、或は對稱的なもの、準對稱的なものの場合であるが、後者は自稱的な我と對稱的な汝を包む我々に對して對稱的なものを主格とする場合である。例へば

おかあさんはあすこにいらつしやるよ。

おとうさんがさうおつしやつたわよ。

おぢいさんは大へん私をかはいがつて下さつた。

そんなに書いて先生がおつしやらなかつたもの。

旦那はもうお出掛だよ。

地藏様が繩にかゝつていらしやる。

の如く、親子の關係、師弟の關係、長幼の關係、主従の關係とか、或は神佛に對して行はれるものである。併し之等の中で最も重要なものは何と言つても皇室敬語でなければならぬ。皇室中心の我が國では君と臣との間は絶對的でなければならぬ。一君萬民的でなければならぬ。億兆の中一人として臣たらざるなく、一人として君を仰がざるなき姿が即ち我が國不變不動の國家體制でなければならぬ。そこに皇室敬語の如きも、言主聽主の關係如何に拘はらず眞に絶對的超越的に行はれなければならない理由があるのである。倫理的緊張が極度に負項的で、譬ひ惡口雜言を放つてゐるやうな場合でも、皇室に對し奉つては必ず敬語を忘れないのが日本語の正しき姿である。倫理的緊張が一時潜在的となり敘述表現に専念する科學的論說や文學的創作の如きものと雖も、皇室敬語に關しては疎にしてはならぬ。日本語では法律の條章の如きもの以外は如何なる場合にあつても常に皇室敬語を用ひてなければならぬのである。然らざれば亂臣賊子の言語と言はれても仕方がない。皇室敬語は眞に絶對的超越的である。嚮に舉げた神佛に對し、或は親子、師弟、長幼、主従間等のものも、現實の我と汝とに超越的であるが、それは絶對的一般的なるものでなく、相對的特殊的なるものと言はなければならぬ。日本語の全面を支配するものでなく部分的現象である。公的でなく私的である。神佛と雖も皇室に關係なきものは私的と言はなければならぬのである。

第二に考へなければならぬことは、第一類のものは言主が聽主にとる倫理的緊張關係が端的に表

示せられ、そこに言主の聽主への敬意とか侮蔑とかといふものと自身の謙讓とか尊大とかといふものとが未分的であり、只識別せられるものはかゝる言主が聽主にとる倫理的緊張の程度、即ちそれが正項的であるか負項的であるかといふ如きことであつたが、第二類のものはかく未分的であつた敬意とか侮蔑とかといふものと謙讓とか尊大とかといふものとが分立的に表示せられるやうになつてゐるのである。即ち第一類の倫理的文法形態は

.....
 (でございます)
 (であります)
 (でござる)
 (です)
 (である)
 (だ.....)

の一系列的識別であつたが、第二類では

.....
 (おほせになる)
 (おつしやる)
 (言ふ)
 (言ひやる)

		る)
(申	しあ	げ
(申		す)
(言		ふ)
(言	ひわ	たす)
		

の如き二系列的識別である。第一類のものでは敬意とか謙讓とかといふものに分立してゐるのではなく、それらが未分的に表示せられてゐるのである。而して「ます」にはその特徴が最もよく表れてゐる。例へば

私が申します。

とも

あなたがおつしやいます。

とも

先生がおつしやいます。

とも「ます」が敬意の場合でも謙讓の場合でも同様に使用せられるのである。敬稱でも謙稱でもないのである。只「ます」を連ねると倫理的緊張が高く、随つて叮嚀にも上品にも聞える譯である。然るに第二類のものではそれが明瞭に分立してゐるのである。例へば「私がおつしやる」「伴がおつ

しやる」ではいけないのであつて、「私が申す」とか「倅が申す」とか、或は「私が言ふ」とか「倅が言ふ」とかとしなければならぬ。「おつしやる」は「あなた」とか「先生」とか「あのお方」とかと言ふ時に用ひるのである。併し第二類のものでも、それが單純に敬稱であるとか謙稱であるとかと言ひ切ることが出来ないものでなければならぬ。分立はしてゐるが、或實質動詞が敬稱動詞であるとか謙稱動詞であるとかと言ふことは本質上出来ないものでなければならぬ。第一、動詞は稱格を表示することは出来ぬ。稱格を表示するものは代名詞更に名詞であつて、動詞の表示し得るものは稱格間の相關々係である。動詞が稱格を表すと考へるのは論理的文法に執はれてゐるからである。論理的文法では動詞は稱格間の緊張關係、行動的關係を表示する形態に過ぎないのである。随つて動詞は

I am

I have

You are

You have

He)
She) is
It)

He)
She) has
It)

の如く主格と固着的關係にあるのではなく、主格にも補格にも兩方に關係を持つてゐるのである。而して其の主格が敬稱ならば敬稱に傾いた動詞であり、謙稱ならば謙稱に傾いた動詞であると言ふ

ことが出来るかも知れないが、補格の稱格とも密接な關係に在ることを忘れてはならないのである。單に主格からのみ考へて、全然之を敬稱動詞とか謙稱動詞とかと言ふものに考へてしまつてはならないのである。倫理的文法の機構内では如何なる動詞でも、二稱格的繋辭でなければならぬのである。然らざれば其の動詞が稱格間の倫理的緊張關係の表示としての倫理的文法形態となることが出来ないのである。

右の問題に就き今少しく突込んで考へて置かねばならぬ。例へば嚮の「言ふ」は倫理的緊張に餘り配意されない普通の詞であるが、「申す」はそれが謙稱に傾いたものと考へることが出来る。「私は申す」と言へるが「あなたが申す」とは言へない。併しそれは單なる謙讓ではなく一面對者への敬意を含むものであると言ふことを忘れてはならぬのである。主格的には謙稱的であるが補格的には敬稱的であると考へなければならぬ。勿論どこまでも論理的文法の考へ方で押進めて行く爲にはかやうな事を考慮する必要もなく、又考慮してゐては却つてそれを混亂に陥れる懸念もあらう。併し倫理的文法ではどこまでもかやうな考慮を進めて行かなければならぬ。論理的文法では敘述面上に表れる要素間の二對立的相關を常に考へて行くのであるが、倫理的文法ではかゝる敘述面を超えた稱格間の二對立的相關を常に考へて行かねばならぬのである。さて「申す」の謙稱的敬稱的兩相をもう少しはつきりさせようとするには、「申す」に「上げる」を加接して「申しあげる」とするので

ある。此の「申しあげる」は言ふまでもなく「申す」に比べて一層謙意の表れた丁寧な詞であるがそれよりも相手に對する敬意がよく表れるやうに工夫された詞であるといふことに注意しなければならぬのである。それは「上げる」を加接したことによるのである。此の連語動詞では「申す」は謙意を「上げる」は敬意を掌つてゐると言つて差支ない。勿論「上げる」はそれ自身としては謙稱的な動詞であるが、此處ではその謙意を寧ろ「申す」の方に譲つて、自身は「申す」に比し特徴的な敬意を擔當してゐると考へなければならぬ。もつと明瞭な例を舉げるならば

おたづね申す。

お待ち申す。

お斷り申す。

お知らせ申す。

の如き言ひ方である。右の敘述を單なる謙稱的組織としてのみ考へては割切れぬ部分があるのである。それは言ふまでもなく接辭「お」の存在である。此の「お」をこゝで何の爲に添加したか。單なる謙稱的組織をするならば

たづね申す。

待ち申す。

斷り申す。

知らせ申す。

の方が寧ろ合理的である。それをわざ／＼「お」を添加した理由は何處にあるか。それは即ち一方に於て敬意を表さんが爲に外ならぬ。敬稱「あなた」に對應する工作に外ならぬ。謙稱「私」に對應しては「申す」であり、敬稱「あなた」に對應しては「おたづね」「お待ち」「お斷り」「お知らせ」即ち「お——」である。故に之等「お——申す」の敘述機構では明かに謙稱的方向と共に敬稱的方向を見ることが出来るのである。

御伺ひ致す。

御察し致す。

御誘ひ致す。

御約束致す。

御同道致す。

御誘引致す。

拜見致す。

拜借致す。

拜承致す。

御送附仕る。

參上仕る。

拜聞仕る。

の如きものも皆さうである。更に

お手傳する。

お知らせする。

お察しする。

お待ちする。

の如きものに至つては、目ばしい稱格的表示は「お」だけである。即ち相手に對する敬意の記號だけしか考慮されて居らぬ。然もそれが謙稱的な敘述機構となつてゐるのである。

お目にかける。

御覽に入れる。

お耳に入れる。

の如きものも略同様である。併し以上の如き事からして、實質動詞も形式動詞と同様に稱格に對し未分的であるなどと速斷してはならぬことは言ふまでもない。上の例にも見るやうに其の組織内部に於てすら已に分裂してゐるものがあるのである。又かやうに動詞組織の内部に分裂が表れてゐなくとも、敘述面に於て主格と補格とに分れて稱格的對立がある以上、その外殼的意義部に然るべき分立を認めなければならぬ。そこに「申す」とか「上げる」などと言つた、主格が謙稱であつて補格に敬稱が表れるものと、「戴く」「おつしやる」「下さる」などのやうに、主格が敬稱で補格に於て敬稱が表れるものとが區別せられるのである。更に主格が謙稱とか敬稱とかといふものであつても補格に於て之に對立すべきものの表れてゐない敘述がある。それは敘述が行動現象を寫して居ないものである。例へば

私はうちに居ます。

私はうちに居ります。

草稿はうちにございます。

先生は向かふにいらつしやいます。

の如き存在動詞による敘述がそれである。又

なか／＼よく書かれる。

休まずに勤められる。

よく勉強される。

今日も同じ事を講釋せられる。

とか或は

字をお書きになる。

歌をおうたひになる。

先生は無言でお歩きになる。

の如き作爲動詞による敘述である。之等は環境とか目的對象とかといふものとの關涉があるが眞の對者と面接して居らぬものである。非行動的非社會的である。勿論動詞特有の意志とか力とかとい

ふものが認められるのであるが、それらが内顯的であり更に潜在的でさへある。故に行動動詞と對比する場合には

お早い方がおよろしうございます。

お美しうございます。

随分お綺麗でいらつしやいます。

御苦勞様です。

の如き狀態的形容や

これはあなたのお帽子です。

あなたは高山さんでいらつしやいますか。

先生は御病氣でいらつしやいます。

の如き概念的限定などと同様、對立的稱格との關係を、實在的な言主或は聽主などと言つた敘述機構の外に求めなければならぬのである。随つて敘述面だけでは、所謂敬稱動詞的であり、又謙稱動詞的と言はなければならぬ。以上のやうな譯で、實質動詞の稱格的分裂は大略左表の如きものとして考へなければならぬと思ふのである。

實質動詞の
稱格的分裂

敬稱(……侮稱)的なるもの	主格が敬稱(……侮稱)的で、補格に謙稱(……慢稱)的なるものが表れるもの 主格が敬稱(……侮稱)的であるといふだけのもの
謙稱(……慢稱)的なるもの	主格が謙稱(……慢稱)的で、補格に敬稱(……侮稱)的なるものが表れるもの 主格が謙稱(……慢稱)的であるといふだけのもの

かやうな實質動詞の外殼的意義部の變形が如何にして行はれるか。敘述面の上に稱格間の緊張關係が如何にして描かれるか。倫理的文法形態の第二類は如何にして形造られるか。次にかゝる形態そのものの構造を問題として考へて見よう。その爲に先づ形態を形造る材料方面から考へて行かうと思ふ。而してかゝる分析から次第に綜合的に進んで見たい。

そこで先づかゝる實質動詞の外殼的意義變形の爲の原本的な材料とも言ふべきものと、副次的な材料とも言ふべきものとがあることを知らねばならぬ。前者は更に特別に發達した實質動詞と或種の助動詞とであるが、後者は接辭である。後者の接辭といふのは主として接頭辭「お」であるが、之は本來的には名詞に添加せられるものである。名詞の稱格を形造るための材料である。それが漸次形容詞とか副詞などにも添加せられ

お早うございます。

新年おめでたうございます。

お珍しい品をいただきました。

あなたはまだお若いのだからうんとこれから勉強なさるんですね。

或は

おあいにくさまでした。

お待遠さまです。

いつもおたつしやで結構な事ですあります。

あまりおかはいさうに存じました。

ごもつともでございますとも。

などの如き言ひ方をするやうになつたのであるが、動詞にも添へられるのである。併し動詞に「お」が添へられると言つても「お行く……」「お来る……」のやうに原本的本質的に行はれるのではない。

お呼びします。

お伺ひします。

お願ひします。

お渡します。

お出でになる。

お立ちになる。

お笑ひになる。

お書せになる。

の如く半ば名詞的になつた、所謂名詞形の如きものにのみ添加せられるのである。この「お」の外に漢語に限り

御覧になる。

御心配になる。

御征伐になる。

御注意する。

御同行する。

の如く「ご」を添へることがある。「ご」は副詞では「御親切に……」「御苦勞様です。」の如く漢語に添へられる外に、「ご尤です。」の如く國語に加へられることも稀にある。

接辭の方は副次的材料の語片であつたが、助動詞は原本的材料語片であると言へる。此の助動詞を下接する方法は遠く上代より今日に一貫するものであつて、然も何れかと言へば近代的といふよ

りは古代的であると言はねばならぬ。勿論現代に於ても盛に活躍してゐるのではあるが、殊に標準口語などでは附帶的名殘的な方法に墮してゐる嫌がある。助動詞そのものも奈良朝では佐行四段の「す」平安朝からは「る」「らる」「す」「さす」などといふ風に語彙的に幾變遷かして來たのであつたが、現代では主として「れる」「られる」を用ひ又時には「せる」「させる」も行はれてゐる。而して之等は何れも未然形所接である。その中「れる」「せる」は

御酒はのまれまいと思ひます。

少し太られたやうです。

なか／＼よく書かれる。

あなたが言はれる通りです。

あの方が手を引かれ／＼はもう致し方がありません。

仕事なされよ、きり／＼しやんと。

くれ／＼も御嘆のあまり御病氣に罹らせられないやう祈ります。

の如く四段に接し、「られる」「させる」は

おとうさんはまだお歸りになつてゐられぬ。

東京のおうちでも困つてをられます。

りつばな着物をきられる。

それはあなたがどう思つてゐられるにしろあなたの御勝手ですが。

私の方へも來られれば、兄の方へもよくおいでになる。

日頃御孝心深い御事とて御心残はあらせられませう。

の如く一段三段に接する。

接辭と助動詞とは専ら敬意を表示する爲の材料であるが、特別に發達せる動詞には敬稱的方向のものと謙稱的方向のものが相分れてゐる。先づ敬稱的なものから述べる。その中存在動詞として「いらしやる」がある。

先生がいらつしやらない。

地藏様が繩にかゝつていらつしやる。

又之は

何處へなりといらつしやい。

早くいらつしやいよ。

の如く「行く」「來る」の意にも用ひられる。或は

あなたはどなたでいらつしやいますか。

お憫巧でいらつしやいますこと。

の如く形式動詞的な用法もするが、「である」「でござる」のやうに未だ一般化して居ない。作爲動詞として「めす」「あがる」「あそばす」「なさる」「おぼしめす」「めしあがる」の如きものがある。「めす」は「呼ぶ」と言ふ意味に用ひられた場合は行動的であるが、

洋服を召す。靴を召す。

車に召す。馬に召す。

お湯を召す。お花を召す。

と言つたやうな場合では總て作爲的と言はねばならぬ。「あがる」と「めしあがる」とは

御飯をおあがりになりましたか。

御酒はあがりますか。

さあ皆さん十分に召上れ。

の如く飲食の場合だけに用ひられる。「おぼしめす」は言ふまでもなく「思ふ」意味に用ひられ、「めしあがる」と共に材料語と言ふより極く丁寧な語として已に成熟してしまつてゐる。「あそばす」は所謂「遊ばせ言葉」の材料となるもので「なさる」と共に「爲る」といふ意味に専ら用ひられる。行動動詞としては「おつしやる」「くださる」の如きものである。殊に「くださる」は徹底的に稱格

間の繫辭となるもので利用の範圍も廣い。次に謙稱的なものの中、存在動詞は主として「ござる」である。併し之は

ここにございました。

それならうちにございます。

もう賣切れて、ございません。

ここにこんな妙なものがござる。

の如く、物の上についてのみ言ふのであつて、人の上についての存在は「ゐる」「をる」が専ら用ひられるのである。又かゝる存在動詞としての「ござる」と形式動詞としての「でござる」とは區別しなければならぬ。作爲動詞としては「まうす」「いたす」「まゐる」「つかまつる」「うけたまはる」「かしこまる」「存する」の如きものがある。又行動動詞としては「いたゞく」「うかがふ」「あがる」「あげる」「さしあげる」の如きものがある。以上の外動詞的材料として、漢語から來た「進呈」「進上」「呈上」「拜見」「拜借」「參上」或は「承知」の如きものもある。又古いものとして、「ます」「います」「おはします」「まします」「きこしめす」「しろしめす」「たまふ」「たまはる」「おはす」「おはす」「わたらす」或は「まつる」「たてまつる」「まゐらす」「罷出る」「罷越す」「罷在り」の如きものがある。

次にかやうな種々の材料を用ひて如何に實質動詞の外殼的意義部を形成するか、倫理的文法形態の第二類を如何にして成立せしめるかといふことに就いて綜合的に考へてみよう。その中接辭の方は全然附庸的副次的なものであるから、中心課題は助動詞と前掲種々の特殊動詞の如きものでなければならぬ。併し「れる」「られる」「せる」「させる」等の助動詞を下接し敬意の動詞を形造ることについては、大略嚮に述べて置いたやうな事であるから、此處では動詞を中心にして倫理的文法形態の第二類の成立狀態を眺めて行くことにする。動詞を以てするものの中に、上に舉げたやうな特殊的に成立して居る動詞を中心にする場合もあるが、その外に「する」とか「なる」とかと言つた何等稱格的色彩を有せず、只意義部の外邊的抽象的な動詞を中心とする場合もある。先づ前者から考へて行く。特殊動詞を中心とする方法は、それを他の動詞に連結して行く連用法によるのである。それらの中にも又敬稱的なものを形造るものと、謙稱的なものを形造るものとある。而して更にその何れの中にも、上に加へられる動詞が普通の形のものと、接辭を添へなどして敬稱的に工作されたものとある。敬稱的な運用動詞を形造るには「なさる」「くださる」「あそばす」を以てするのである。而して「なさる」では

(一) 始終お前をさそひなさるお友達がみえました。

又そんな事を言ひなさる。

早く來なさればよいのに。

さあ道を急ぎなさい。

(二) 心配なさいますな。

母の苦勞なされた様子は生涯忘れません。

おとうさんは誰に投票なさるのです。

の如く、上添の動詞が普通のもの

(一) どうしてもおきゝなさない。

どんな事があつてもふたをおあけなさいますな。

中々上手にお書きなさる。

朝早くおおきなさるならきつとそれを御覧になりませう。

さあお出でなさい。

もうお出かけなさつたさうです。

(二) 親御も御心配なさるし御兄弟も御苦勞なさる。

御安心なさつて大丈夫です。

の如く上添の動詞に「お」「ご」等の接辭を添へたものとある。「くださる」では

(一) 遠方のところを送り下されて有難うございます。

(二) どうしても教へて下さらない。

どなたが書いて下さつたんですか。

やかましく言つて下さる人の方が有難い。

何でも買つて來て下さる。

早く歸つて下さればよいと思つた。

少しは見てやつて下さい。

の如きものと

(一) もうお聞入れ下さらないのでせうか。

ようこそお出で下さいました。

よくお尋ね下さるお方です。

お出で下さればお目にかけませう。

お歸り下さい。

(二) 御通知下さる。

御免下さいまし。

十分に御注意下さい。

の如く上添の動詞に「お」「ご」等の接辭を添へたものとある。「あそばす」では

(一) お出であそばさうとおぼしめすか。

おやすみ遊ばすやう申し上げなさい。

お出かけあそばしたところでございます。

たゞ今お起き遊ばす。

ほんたうに早くお歸りあそばせばよい。

(二) 御參内遊ばされます。

御心配あそばす。

御覽あそばせ。

の如く上添の動詞に「お」「ご」等の接辭を添へたものが多く、然らざるものは「出張遊ばす」「心配あそばす」の如く、上添の動詞が漢語の場合だけに限られてゐるやうである。又前の「くださる」に於て、接辭を添へないものの中、上添の動詞が漢語の場合はなく、國語の動詞でも多く「て」を下接したものを以てするやうである。

謙稱的な連用動詞を形造るには「いたす」「まうす」「つかまつる」「まうしあげる」を以てする。

而して之等は何れも上添の動詞に「お」「ご」等の接辭を添へたりなどしてそれを敬稱的に工作した
ものが多い。例へば

「いたす」

(一) お送りいたさぬ。

お待ちいたします。

お任せいたす。

お任せいたすことしにます。

かやうにおつくりいたせばよろしうございませう。

おすゝめ致せ。

(二) 別に御通知致さぬ。

御無沙汰致しました。

御奉公致す積りでございます。

拜見致す。

拜借致したい。

「まうす」

(一) あの方もお呼び申さうと思ひます。

お伺ひまうします。

みんなお待ち申して居ります。

さうお答へ申せばよろしいのですか。

お頼み申す。

(二) 御案内申します。

御同情申します。

「まうしあげる」

(一) 別にお知らせ申し上げないことに致します。

さうお答へ申し上げますればすみませう。

お伺ひ申し上げる間もございませんでした。

(二) 御案内申し上げます。

御推量申し上げます。

「つかまつる」

(一) お送りつかまつらない。

お送りつかまつります。

お受けつかまつる。

(二) いざ御同道仕らう。

拜見仕ります。

大勢參上仕りましてさぞ御迷惑でございませう。

併し「いたす」「まうす」「つかまつる」では上達の動詞がそのまゝのものも多少行はれる。

「いたす」

(一) 大笑いたしました。

大さわぎいたしました。

浮いたり沈んだり致して居ります。

(二) 近頃感心致した。

明日からいよく出勤致します。

先方が承知致せば、それで話がさまります。

「まうす」

どうして證文は書かせ申さう。

まづ大神の御心をなぐさめ申さうと神樂をおはじめになりました。
「つかまつる」

承知仕ります。

以上の如き連用法を行ふに際し、上添の動詞との間へ「は」「も」等の助詞を介入せしめることも出来る。例へば

言ひはなさらぬ。言ひもなさるまい。

心配はなさらぬ。心配もなさるまい。

御安心はなさつて大丈夫です。

送りは下さいました。送りも下さらない。

お尋ねは下さいました。

もうお聞入れも下さらぬ。

時々御心配はあそばす。

お起きも遊ばさなくなりました。

お任せはいたす。別にお奨めもいたさぬ。

拜見は致しました。拜見も致さぬ。

お待ちは申して居りました。

別にお知らせも申し上げないことに致します。

次に稱格的に特に發達したものでなく、「する」「なる」の如き普通の動詞を中心とするものに就いて考へて見よう。之等の中で前の如く連用法によるものと、更に特別な構成法によるものがあるが、又それらの間に敬稱的なものと謙稱的なものとある。その中敬稱的なものは「なる」を中心にして特別な構成法をとるのである。この構成法の一般は「なる」が助詞「に」を介して上に名詞形の敬稱的動詞をとるのである。即ち

敬稱的動詞 + に + なる

の如き形となる譯である。その中

おほせになる。 おほせつけになる。

の如きものは上添の動詞が本來的に敬稱的であるところから、別に敬稱的工作の行はれないものである。併し多くは上添の動詞に接辭「お」などを添へ敬稱的工作を爲し

お + 動詞の名詞形 + に + なる

の如き形をとるのである。この中

おあがりになる。 お下しになる。

の如く、本来の敬稱的動詞に更に「お」を加へるものもあるが、一般には次の如く普通の動詞が用ひられる。

お読みになる。 お書きになる。

お立ちになる。 お坐りになる。

おうたひになる。 お笑ひになる。

お分りになる。 おかへりになる。

おやりになる。 おやめになる。

おなくなりになる。 お出でになる。

おありになる。 お出来になる。

お書かせになる。 お作らせになる。

又漢語を用ひて

御覧になる。 御征伐になる。

御心配になる。 御出發になる。

の如き方法も行はれる。謙稱的なものには連用法をとるものと特別な構成法をとるものとある。

連用法をとるものと言ふのは「する」を接辭「お」を添へ敬稱的動詞としたものに連接して行くものである。

お呼びする。 お手傳する。

おかへしする。 お願する。

お詣りする。 お渡しする。

お知らせする。 お察しする。

お引受けする。 おわびする。

又漢語から來た敬稱動詞的なものに連接するものもある。

進呈する。 呈上する。

拜見する。 拜借する。

參上する。 參拜する。

或は又以上の如きものに於て、上添の動詞との間へ助詞「は」「も」等を介入せしめることを出来る。例へば

お返しはしました。

お願ひもしお話も承りたうございます。

拜借はしたいと思ひます。

拜見もしませう。

特別な構成法をとるものといふのは

お目にかける。

御覽に入れる。

お耳に入れる。

おほめに預る。

御馳走になる。

お世話になる。

の如く稱格に關係のない或種の動詞が特定の敬稱的な補格をとるものである。

四

倫理的文法は以上の如く敘述面、論理的文法面を稱格間の倫理的緊張關係の形態として取扱ふ文法學の一部面である。稱格間の行動的緊張が論理的文法面の場に残す足跡を形態とする對話現象に於ける言語的制約である。二稱格間の緊辭的取扱である。かくて先づその話の敘述的全面の樣態が

言主と聽主との間に於ける倫理的緊張關係の形態と考へなければならぬものである。對話の話線機構は單に我の恣意によつて成れるものでもなく、又汝の生んだものでもなく、我と汝との相關々係を表示として成立してゐるものである。一々の話の様態は我と汝との對話的相關を表記する形態である。而して其の話の全面的形態の特標とも見做すべきものは、その話線の終末を結ぶ「ます」に統率せられたる一連の形態部である。それは話の全面的形態性を最も端的に表示するもの、謂はゞ形態の形態である。故に我々は先づ話の全面に心を配り乍らも、かゝる「ます」形態の本質を研究しなければならぬのである。それが第一類の倫理的文法形態論であり、その事象的展開が倫理的文法事實の個々の認識の第一部分を成す譯である。次に更に目を轉じ、かゝる話の敘述機構の内部を見ると、そこには倫理的世界觀とも言ふべきものが横倒しに映じてゐるのである。それは現實的に對在する言主と聽主との相關々係を樞軸として廣がる世界觀は勿論のこと、かゝる關係を超え之を尙私と觀ずる累層的な公私的相關も見られる。而してかゝる種々の相關々係の張りを表示する中心的なものは述格的部分、殊更實質的動詞の外殼的緣暈的意義部である。動詞に表されてある意志作用の様態である。それが倫理的世界觀を繋ぐ形而物であり、倫理的文法形態の第二類を成すものである。之には種々のものがあるであらうが、殊に現代標準口語などでは、外殼的意義部のみを抽象せる形の動詞に、實質的動詞の連用形とか名詞形とかを冠する方式が最も重要なものであらうと

思ふ。助動詞的延展はもう補助的となり、接辭の添加は勿論副次的工作に過ぎない。故に第二類の倫理的文法形態としては、敬稱の方面では「なる」の如きもの、謙稱の方面では「する」の如きものに率ゐられる抽象的動詞の活動が中心となるべきものと考へる。かゝる「なる」「する」的形態の本質を研究するのが第二類の倫理的な倫理的な文法形態論であり、その事實的展開が個々の倫理的な文法事實を認識する第二部分をなす譯である。

かやうな倫理的な文法機構は、その言語を以て生活し思索し行動し表現する民族社會集團の、偽らざる、眞に具體的實際的な倫理的思想が文法的事實として凝結するに至つたものである。民族國民の道德的結晶物であり國家社會を流れる精神的血液である。私はかゝる倫理的な文法機構の眞實なる體系づけを庶幾して止まない。眞の意味の倫理的な文法體系の出で來ることを今日特に待望するのである。殊に日本語は周知の如くかやうな點に於て世界に冠たる事實性を包有してゐるのである。日本語程この倫理的な文法機構の眞相を掴むに恰好な言語は餘り外にないのである。實に天與の文化財と言はねばならぬ。日本文法學は此の點に於て大いに自重し、逸早くその眞義を捉へ之を世界の人々にも理解せしめ、偏狹に墮せる一般文法論の如きものをも一段と高めて行く覺悟がなければならぬと思ふ。

倫理的な文法機構の眼目とも言ふべきものは結局「汝」といふことでなければならぬ。汝性といふ

ことをその筋金として千々に開けて行く文法事實の入組である。論理的文法機構は物を筋金とし審美的文法機構は我を筋金とするのであるが、倫理的文法機構の筋金は汝である。一體行動的世界、歴史的社會的現實に立ち、我が眞に汝といふものを見ることによつてかゝる世界の眞相が開けて行くのである。我が汝を見ることに於て我の眞の自覺があり、而して汝の領界と我の領界といふものが明瞭となり、かくて眞の客觀界對象界といふものも知ることが出来るのである。かゝる行動的世界の一般的規格づけは我が國の代名詞の稱格に於て先づ表れてゐる。わ（我）、な（汝）、こ（此）、そ（其）、あ（彼）の五つのダイメンションは即ちそれである。而してその最も根本原理、或は基準尺度ともなるべきものは我↓汝であり、かやうな尺度によつて、所謂第三人稱の世界が見られ其處に「此」「其」「彼」の三稱格が成立するのである。然も我↓汝の尺度は深い内容を有する尺度でなければならぬ。我と汝との倫理的緊張關係による微分的可動の尺度でなければならぬ。その可動領域は我の側面に於ては謙讓……高慢であり、汝の側面に於ては尊敬……侮蔑である。そこに自稱的なもの對稱的なものなどの中に、それぞれ謙稱（慢稱）敬稱（侮稱）などと言つた二次的稱格が成立するのである。而してかやうな可動的指標づけは、名詞を主とする外殼的意義部によつて爲されるのである。接辭「お」の添加如何といふことはその代表的なものと考へてよい。

汝性といふことは要するに我↓汝といふ精神的様態である。此の行動的世界に於て我がどこま

でも我の主我性を捨て、行く捨我奉仕滅私奉公の誠である。行動的な現實の世界に於ける眞の實在と言へば、種々雑多な關係を以て對立して來る無限數的汝の外にはない。而して我とはかゝる汝に對するものと定義するより外に道がない。そこに倫理道德といふものの根元があるのである。かゝる眞實の前に於て、我といふものを固執することなく寧ろ之を消却し、常に汝を立て、行かうとすることが人間の有する汝性といふものであり、それが處世人倫の要諦でなければならぬ。人間の唯一の在り方は汝性といふことでなければならぬ。それには我の高慢性を抑制しどこまでも謙讓に進むと同時に、汝を蔑輕侮せんとする不實の翳を排除しどこまでも尊敬に向かはねばならぬ。之を一言にして言へば恭敬とも稱すべきものか、兎も角かゝる精神的張りが倫理的緊張であり、それがともすれば消極的に墮せんとするのであるが、どこまでも積極的に敬と謙とを求めて行かうとするのが倫理的勇と言ふものである。倫理的文法はかゝる汝性に立脚する文法事實である。大和民族はかかる倫理的文法の機構を幾千年の言語的實踐によつて鍛へ擧げたのである。それは眞の體驗から昇華したる倫理的規格であり、法典である。我々は古文獻によつて殘された神話を誦讀することにより日本精神を高揚すると共に、言語によつて傳承されたかゝる汝性の誠に習熟することにより國民道德日本倫理を宣揚しなければならない。

かやうな汝性といふものは單視面的なものではない。例へば男女關係の如きものではない。行動

的世界の構造は男女關係の如きものによつて平面的に形造られてゐるのではなく、複雑に交錯する多面的構造でなければならぬ。大小廣狹種々様々の女性面によつて形造られてゐる複合的動態でなければならぬ。例へばそこに親子關係と言ふものがある。子供は親に對して同胞としての我々である。かゝる我々が相互間では我と汝とであるが、親に對しては公私的關係である。かやうな事が同胞内の兄妹と弟妹との間にも成立して居り、又祖先と家との間にも成立してゐる。併し之等も對社會的對國家的には私でなければならぬ。一身は勿論のこと一家をも顧みず奉公の誠を竭すのが人倫の大道である。そこには又、主從關係とか師弟關係とか長幼關係とか身分地位階級などといふ種々の倫理的小宇宙が成立してゐるのである。併し乍らかゝる公私諸關係の最高最至にして絶對的なものは皇室と臣民との關係でなければならぬ。君臣の大義でなければならぬ。君臣の大義は我が國倫理道德の絶對境である。日本國に於て成立するあらゆる倫理的緊張關係は常に此處に歸一し、此處より發出してゐなければならぬ。信仰の對象である神佛の如きも皇室中心でなければならぬ。皇室中心ならざるものは全智全能の神佛と雖も單に信仰の自由を許されたる私物でなければならぬ。天皇は現つ神として現し民草を知ろしめ給ふのであるが、又皇祖神を始めとして八百萬の神々を祭り給ふのである。此の御事が我が國の倫理道德を決定すると共に、宗教信仰の一切をも決定するのである。

以上の如くであるから我が國倫理道德の最小單位的なるもの或は圖式方式的なるものは、汝性即ち我↓汝の如きものと考へることが出来るが、一方之等道德要素を統率する最高最至の絶對境地に君臣の大義がある。家族的共同國家體の國民は皆等しく天皇を御親とお慕ひ申し上げると共に、又現つ神として仰ぎ奉つてゐるのである。そこに君民一體であるが君と臣との分がどこまでも明かでなければならぬ。我が國體の尊嚴にして天壤とともに、榮え行く所以は一にこゝに在るのである。倫理的文法機構はかゝる日本倫理の絶對境から最小最微の單位的なるものに至るまで浸潤し、之を規格づけてゐるのである。本居宣長は古事記傳の中で、凡て神とは古典等に表れた天地諸神を始として、それを祀つてゐる社に座す御靈をも申し、又人倫は勿論のこと、禽獸草木のたぐひ或は海山など、其の他如何なるものでも尋常ならすすぐれたことがあり畏るべき物の一切であるといふやうに、神の本質に就いて説明してゐる。私がこゝで汝性といふのは、恰も上代人が萬物の上に神を見た如く、此の行動的世界に於て我に對立して来る、我的如何とも爲し得ざる、又然私を一切交へてはならぬ眞の實在物を言ふのである。汝性が上代人の神性に通するのである。雷に上代人のみではなく、我々がこの歴史的現實社會に於て眞劔なる態度で臨めばのぞむ程、常に様々の神に出會ふとも言へる。神性に直面し得る我が即ち誠である。神世といふのは遠き昔にあるばかりではなく眞に行動的現實に立てば何時の世もそこは神世でなければならぬ。神世といふのは或固定された

る時代ではなく、永遠の今でなければならぬ。天皇はこの歴史的現實を常に神世として統べ給ふお方である。倫理的文法機構はかゝる神世を今と爲す民族の誠から生れた制約事實である。我々は神話の誦讀によつて此の現實に神世を自覺すると同時に、祖先から語り残された倫理的文法を眞に理解し實踐して行くことによつて、今もこの世に神性と直面することが出来るのである。